

アイスホッケー初心者のスケートスキル獲得過程 Skating Skills Acquisition Process of Ice Hockey Beginner

山田 雅之
Masayuki Yamada

日本教育大学院大学
Japan Professional School of Education
m-yamada@kyoiku-u.jp

Abstract

This article presents skating skills acquisition process of ice hockey beginner. The results suggest that there is a change in the coaching as appropriate.

Keywords — Acquisition Process, Beginner, Skating Skills, Ice Hockey, Coaching

1. はじめに

本研究はアイスホッケー初心者の子供を対象にスケートを滑れるようになるまでの過程における補助者のコーチング方法と認知の過程をフィールドで採取した研究である。

スポーツに関わる熟達化研究の多くは熟達者と非熟達者を比較する実験が多くみられ、フィールドにおけるリアルな熟達化研究が求められている。Roy [1]は、子供の単語の獲得過程における補助者（家族）の支援がいかに変化しているかを23万時間に及ぶ映像と音声のデータから示したが、スポーツにおいてもこのようなリアルなフィールドにおけるデータを採取し熟達化研究を進めることが必要だと言える。

2. 目的

本研究では、アイスホッケー初心者の子供が初めてスケートを履き、氷の上に乗ってから一人で滑れるようになるまでの過程において、補助者の支援方法が変化していく様子を明らかにすることを目的とする。本研究によって、Roy [1]の単語獲得過程で見られた知見が、スキル獲得でも起きていることを示すことを目指す。

3. 実践

実践は2015年3月から開始し、2015年7月

時点で8回分のデータを採取した。実践は都内の少年アイスホッケーチームの練習で実施され、1回の練習が90分間であった。学習者は1名で実践開始時点で4歳10ヶ月であった。コーチとなる補助者はチームの保護者の一名が中心となっていたが、都合により他の保護者となる日もあった。中心となった補助者はカナダ人であったが、日常の日本語会話に支障はなかった。

4. 分析方法

練習は補助者のヘルメットに設置した小型ビデオカメラ（GoPro）で録画していた。本論文では初めてスケートを履き、氷に乗った日の映像データ及びそこから得られた発話を分析した。本論文では1日目のデータを対象に学習者がリンクの氷上に乗った状態から、最終的にリンクの外に出るまでの約40分間のデータを分析対象とした。

GoProで撮影した映像から1秒毎の学習者の状態を以下の4点について記述した（括弧内は図1での色を示す）。

- ①学習者の居場所：リンク内（白）、リンク外（黒）
- ②学習者の身体の状態：立つ（紫）、膝立ち（緑）、座る（青）、這（黄）、伏せる（橙）、寝る（赤）
- ③補助者との接触：補助者A（赤）、補助者B（青）
- ④道具との接触：コーン（赤）、スティック（緑）、両方（紫）

本研究ではこれに加え録画された映像から音声を書き起こした。映像と音声から補助者が学習者に与えている課題を抽出し、補助者の支援方法が如何に変化しているかを検討した。

本研究では氷上での学習者の状態に対し、補助者の支援が如何に変化していくかに焦点を当てる。

そのため、学習者の状態を示すため学習者の姿勢及び補助について分類した。学習者の姿勢は氷と身体の接地点の数を目安に定義した。バイオメカニクス研究等では学習者の姿勢の定義として学習者と地面の接地点数で定義することが多いことからこの方法を用いた。

5. 結果

図1及び音声から、本研究ではこの日のトレーニングを5つの期に分類した(図中①から⑤)。

第1期(立つ)：学習者が初めて氷に乗ったため、補助者Aに抱きかかえている状態である。しかしながら、補助者はたびたび「立って」と発言している。立つことが課題でありながら、実際は抱きかかえられている状態である。図においては補助者と接触し、立っている(抱きかかえられている)ことが示されている。

第2期(パックで遊ぶ)：抱きかかえられていないと立ってられないことから膝立ちの姿勢にし、コーンを利用してパックで遊んでいる。図では補助者との接触がなくなり、学習者に膝立ちの姿勢が見られコーンとの接触も見られる。後半には補助者Bが現れ図からも補助者Bとの接触が見られるようになる。

第3期(氷の感覚をつかむ)：補助者Aは立つという課題に移行しようとし「立ってみる？自分で立ってみて」という発言をするが、補助者Bが「わかった！座ってみて一回」と、氷の感触をつかむため学習者の多様な姿勢が生まれるような課題に切り替えている。学習者をコーンの上に座らせてスティックで引っ張って遊ぶ等しているため学習者には様々な姿勢が見られるようになる。

第4期(立つ)：立つことを課題とし、つかまり立ちの練習を始める。補助者Bが「じゃあ今度はこれに、押さえて立ってみて」とデモを見せて学習者に対してコーチングした後、数秒のつかまり立ちを数回繰り返し、学習者はコーンを持って(約12秒)自立することに成功する。図ではたびたび補助者との接触無しでコーンを持っている様子が見える。

第5期(パックで遊ぶ)：再び補助者Aが中心となって、膝立ちの状態でパックを使って遊んでいる。第2期との違いは学習者が少しバランスをとれるようになっている様子で、コーンではなく自身のスティックを利用しているため、補助者及び道具との接触が無い時間が多くみられる。

6. 考察

これらの結果は、補助者が獲得させたいスキルに対し、課題として「立つ→パックで遊ぶ→氷の感覚をつかむ」という過程を経て、再び「立つ」という課題にチャレンジすることで学習者が立てるようになっていることを示唆している。これは補助者が学習者の状態に対して課題を変えている可能性を示唆していると言える。

7. 展望

本研究では今後補助者と学習者の距離に焦点を当てた分析をしていく予定である。また補助者や学習者、保護者のメタ認知データを分析し、Roy[1]の研究に認知的な側面を加えた研究を実践したい。

参考文献

[1] Roy,D. (2009) “New Horizons in the Study of Child Language Acquisition”, Proceedings of Inrespeech 2009,

※本研究は第3回間合い研究会において発表した内容にデータを追加し、加筆修正したものです。

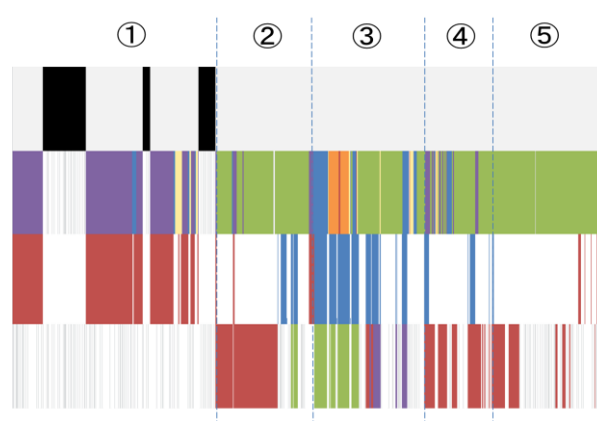


図1 1日目の学習者の状態